東陽円月研究序説

――青年期修学時代を中心とする伝記考証――

龍溪章雄

一　はじめに―東陽円月研究の教学史的意義―

近世・近代の宗学者東陽円月（一八一八～一九〇二。八十五歳。以下円月）は、「豊前学派の大成者」として知られている。しかし円月には、そうした一般的通念的評言から窺えるような単なる学者、研究者としてだけでなく、現実社会と密接に関わる活動家、いわゆる社会的実践者としての横顔が見られる。そのことは夙に児玉識が月性研究の中で間接的ながらも鋭く指摘しているとおりである。[1] 筆者なりの評言を使うならば「行動する宗学者」、そこに宗学者円月の、同時代他にほとんど類例[2]を見ない個性が見てとれる。と同時に、円月教学の教学史的・思想史的位相をトータルに分析把捉することを可能とする視座を、上記の人物像は提供してくれているものと思考する。

「豊前学派の大成者」としての教学史的評価は、教義解釈の一領域である行信論に即したものである。師月珠の称徳論を深化せしめた名義論を軸として「能所不二の能行説（円融能行説）」を完成させたという点で、その評価は妥当なものと言えよう。また円月には、その教学の特色として従来、滅罪論では「用滅相存説」、真俗二諦論では「俗諦薫発説」が指摘されている。さらに安居本講停講の事由となった、「信一念後に地獄行きの機なし」とす

る独自の二種深信解釈もある。いずれも個性的な学説として周知の事柄に属する。

しかし、これらの評価・指摘はいずれも円月の教学の諸側面を言わば論題的に個別に取り上げたものであり、学説相互の有機的連関性への視角は見落されてきた[3]。筆者はかねてより行信論、滅罪論、真俗二諦論、二種深信解釈といった諸学説は各々独立もしくは孤立したものとして成立しているのではなく、それらの間には密接な関連性があり、一つの円月独自の骨太の論理がそこには貫かれており、そのことが同時代の他の多くの宗学者には窺いにくいきわめて個性的な宗学者像（「行動する宗学者」）形成の要因となっている、との仮説を抱いている[4]。

その仮説を検証するためには、円月の学問と思想の全容解明をとおして、円月教学の教学史的・思想史的意義をトータルに再評価する作業が必要である。本論では、検証作業の第一着手として、円月の青年期修学時代を中心に伝記行実の考証をとおして、学問と思想の形成過程の一端を検討する。また併せて、今後の研究の資とするためにも、円月の伝記年譜の欠を多少なりとも補いたい。具体的には、恒遠醒窓の漢学塾における修学時代を対象に取り上げる。年齢としては、従来の資料によって恒遠塾入門の年とされる十五歳から、退塾の年とされる二十歳までの時期である。

二　伝記関連史資料とその問題点

円月の伝記に関しては、これまで例えば「東陽円月伝」といった纏まった先行研究はない。一次史料としては児玉識によって紹介されている円月生家西光寺蔵「明細帳」[5]、また円月門下の堀順乗の手により師生前に成る「略伝」[6]が一次史料に準ずるものとしてある外は、『仏教大辞彙』[7]、岡村周薩『真宗大辞典』[8]、井上哲雄『真宗本派学僧逸伝』[9]等の辞典類に、やや詳細な行実紹介があるのみである[10]。

本論末尾に掲げた「東陽円月伝記関連資料記述比較表」は、試みに右の「略伝」以下の諸資料における記述を比較したものであるが、概ね「略伝」が他の辞書類の底本となっていることが判明する。一部、「略伝」記述の簡を補っていたり（16―タ―m―㋑）、新たに事項を付加する（ただし、「比較表」末尾省略箇所）など、表記も含めて工夫は幾分見られるものの（その点では多少参考になるところもあるが）、基本的には「略伝」を踏襲していることは明白である。なかでも、青年期における漢学塾修学時代、青年期から壮年期にかけての本山学林修学時代（取り敢えず下限を学階「助教」昇階までとする）に関しては、『仏教大辞彙』以下の記述は、「略伝」の記事の域を全く出ない。円月の学問・思想形成の跡を解明するうえで、「略伝」や辞典類だけでは、そうした資料の性格上当然とは言え、十分ではない。加えて、本稿では紙数の関係上その全てにわたって触れることは出来ないが、「略伝」には円月の上記修学時代の行実年譜を確定するうえで見逃すことの出来ない誤りも散見される。

そこで資料の欠を補うべく、円月の漢学塾修学時代について、上述の「明細帳」並びに児玉識等の研究を参考にし、また『龍谷大学三百五十年史』史料編に収載されている学林関係記録史料にも拠りつつ、以下考証を進めていくこととする。

三　漢学塾修学時代の行実（1）入門の年齢と事縁

円月は文政元年（一八一八）、豊前国宇佐郡水崎村（当時。現、大分県豊後高田市水崎）[11]の西本願寺末西光寺に出生した。父円超の第五子[12]であった。幼少期の行実としては、「略伝」に拠れば「幼にして老父円超師に就て習字、経書を読み[13]」とあり、父に就いて手習いなど初歩的なリテラシーを習得したようである。そして当時の僧家子弟の一般的修学状況を物語るかのように、漢学塾（私塾）で教育を受けている。

円月が入門した先は、同じ豊前国上毛郡薬師寺村（後、築上郡横武村。現、福岡県豊前市字薬師寺）、恒遠醒窓の塾（蔵春園）であった。入門時の年齢は、「略伝」では「十五歳」[14]とされているが、「明細帳」に拠れば正確には「十四歳」、即ち天保二年（一八三一）の時、そして同年の入門者に周防国出身の月性（大島郡遠崎村妙円寺。文化十四年（一八一七）生。当時十五歳）のいたことが知られる。[15]

恒遠塾は当時、村上仏山の水哉園（京都郡稗田村）と並んで豊前の二大漢学塾と称され、遊学生の大部分は月性のように長州藩出身の真宗僧侶であったという。[16]塾主の恒遠醒窓（享和三年（一八〇三）～文久元年（一八六一））については、吉富治一「詩人としての月性」[17]に左のように紹介されている。

「恒遠醒窓」豊前筑上郡横武村の人、諱は和、字は士達、通称頼母、醒窓は其の号、轟谷・楳川・連帆楼等の別号あり。広瀬淡窓に学び、郷に帰り家塾を起して子弟を教ゆ。其の学朱子を奉じ、又陽明の説を採り、王覇を弁じ大義名分を明かにす。月性は其の門下生であった。安政六年五月三日没した。行年五十九歳。

なお、筑上郡は「築上郡」、諱の和は「和市」、安政六年は「文久元年」（一八六一）が正しい。また連帆楼は「遠帆楼」の誤りである。[18]

さて、円月がこの恒遠塾を選んだ経緯については不明である。あるいは多くの真宗僧侶を受け入れていたという、真宗僧侶に寛容な塾の特徴も事由としてあったのかも知れない。この点について以下少しく筆者なりの考証を加えてみたい。

恒遠醒窓は、近世後期日本を代表する漢学塾の一つである、広瀬淡窓（天明二年（一七八二）～安政三年（一八五六）七十五歳没）が主宰する咸宜園（豊前国日田。文化十四年（一八一七）開塾、淡窓三十六歳時）に学んでいる。『増補淡窓全集』所収の入門記録「入門簿」に拠れば、入門は文政二年（一八一九）二月[19]、当時醒窓十七歳の

時であり、塾頭格に当たる「都講」にまで昇るほどの人物であった。やがて学業を終えて文政八年（一八二五）八月、二十三歳の時に咸宜園を退塾し郷里に帰り、[20]私塾を開いている。在塾期間は足掛け七年であった。

ところで、この恒遠醒窓と同時期、咸宜園に在籍していた人物に「圓備」なる者がいる。先の咸宜園の入門記録に「文政七年五月廿日　豊前宇佐郡水崎村　西光寺釋圓備[21]」と出るのがそれである。淡窓の日記『懐旧楼筆記巻二十三』文政七年条下にも、「此歳入門スル者」の中に「釋圓備宇佐郡人」の名が見える。[22]そして、淡窓日記の文政八年正月五日条下に、当時の塾生として「頼母」「圓備」の名がともに出ている。[23]「頼母」は醒窓のことであるから、「圓備」は恒遠醒窓と学友であったことが知られる（後に確認する両者の進級状況から、醒窓の方が年長であったことはほぼ間違いない）。

念のために文政七年（一八二四）五月二十日咸宜園入門（入寮）後の圓備の動静を「月旦評」等に拠り検すると、次のようになる。五月二十六日「入席」。閏八月二十六日「一級下」に進級、当時門下生全一四三名、うち在塾（寮）生六六名。九月二十日帰郷（一時帰国）。十月二日帰塾。［因みに、恒遠醒窓は圓備入塾当時すでに「六級下」、十一月二十六日「六級上」に進級。当時の咸宜園の等級制の最上位は「七級上」］十二月二十一日「一級上」に進級。十二月三十日、在塾越年者四〇名中に「圓備」の名が見える。翌文政八年（一八二五）正月六日、藩主から門下生四人に賜あり、その中に「圓備」の名が出る。正月二十八日「二級下」に進級。二月二十四日、当時在塾生八三名。三月二十六日「二級上」に進級、当時在塾生九一名。五月二十七日「三級下」に進級。文政十一年（一八二八）正月二十六日「四級下」に進級。文政八年五月二十七日「三級下」に進級の後、二年半のブランクがある。何らかの事情でいったん退塾帰国し、文政十年後半の頃に再入塾したか。再入門の例は月性の叔父周邦など多く見られる。この間の淡窓の日記が欠落しているため、詳細は不明である。文政十一年二月以降に「圓備」の記事は見

られない。[24] いずれにしても文政八年八月三日、恒遠醒窓は「都講」に任ぜられて[25]間もなく同月中に退塾帰郷しているから、「圓備」は醒窓と一年余り同窓の間柄にあったことになろう。

一方、本山学林記録に拠れば、「有隣」なる人物の存在に注目させられる。『学林万検』の嘉永元年（一八四八）条下に、左のような記事が記されている。

六月五日、御呼出ニ付参殿、来酉年監事・承襲左之通被仰付御書下ヶ有之

一監事　（中略）
一同　（中略）
一承襲　（中略）
一同　豊前宇佐郡水崎村西光寺住　有隣[26]

「有隣」は嘉永二年夏安居の「承襲」役に任命されている。「承襲」とは、翌年の夏安居に知事の職に当たる予定の者が、その前年に見習いとして学林に滞在して知事職を補佐する学林役懸りの一つである。煩雑な学事をスムーズに引き継ぐための制度であった。嘉永三年（一八五〇）条下に、

嘉永三庚戌夏

兼主議　河州　龍暁
知事　豊前　有隣[27]

とあり、「有隣」は確かに嘉永三年夏安居で「知事」を務めている。[28]

以上のことから、「有隣」なる人物は少なくとも嘉永元年から同三年の間、「豊前宇佐郡水崎村西光寺」の住職であったことが知られる。咸宜園での「文政七年五月廿日　豊前宇佐郡水崎村　西光寺釋圓備」とこの「豊前宇佐

郡水崎村西光寺住　有隣」とは、「圓備」は法名（実名）、「有隣」は学林における懸籍名と考えれば、同一人物の可能性が大きい。今は断定を控え、ひとまず仮説として提示しておきたい。

さらに、『学林江被仰出申渡帳』に拠れば、嘉永五年（一八五二）六月の記事に、

六月十四日

一　豊前宇佐郡水崎村
　　西光寺次男　円月
得業被仰付之(29)

と出る。円月の学階「得業」授与に関する史料である。この史料に拠り、父円超の「第五子」円月が「次男」であったことが判明する。とすれば、嘉永元年当時すでに西光寺住職であった「有隣」は、円超の長男という可能性が出てくる。嘉永五年は円月三十五歳、当時未だ住職を継承しておらず、兄と思われる「有隣」が住職であったことが分かる。円月の西光寺住職継承は、『看護知事名籍』文久元年夏間の役職名下に、

参事　豊前　宇佐郡水崎村西光寺住　円月(30)

とあるから、遅くとも文久元年（一八六一）当時（円月四十四歳）すでに住職継承済であったことが知られよう。

以上の点から推定されることは、嘉永五年（一八五二）円月三十五歳～文久元年（一八六一）円月四十四歳の間に、兄「圓備」（円超の長男。学林懸籍名「有隣」）に何らかの事由があり（例えば逝去）、弟円月（円超の次男）が西光寺を継職した、ということである。

恒遠醒窓が学業を終えて咸宜園を退塾し豊前上毛郡薬師寺村に帰郷した文政八年（一八二五）八月（当時二十三歳）の暮、広瀬淡窓は宿痾が再発、療養生活を続けることとなった。翌年三月頃授業を再開するも病状は一進一退、

塾中の都講が度々代講していた。[31] 円月の兄「圓備」（「有隣」）は学林修学以前漢学塾咸宜園で醒窓と一年余り同学であったが、咸宜園での学業を終えて帰郷（仮に文政十一年（一八二八）とすると、在塾期間約五年）した兄「圓備」の勧めにより、天保二年（一八三一）円月十四歳の時、兄のかつての学兄恒遠醒窓の塾（文政八年開塾）への遊学の道を選んだとも考えられよう。師淡窓の病状が思わしくなく、入門しても十分な指導を受けることが出来ないとの判断が働いたのかも知れない。[32] 史料不足につき単なる憶測の域を出ないが、取り敢えず仮説として提示しておきたい。

四　漢学塾修学時代の行実（2）恒遠塾のカリキュラム及び修学期間

円月の入門は十四歳、天保二年（一八三一）の時であった。恒遠塾の開塾は文政八年であったから、円月の入塾はその六年後となる（師醒窓二十九歳）。梨花寮（寄宿舎）に寝起きし、勉学に精励したことと思われる。その円月の勉学振りについては未詳ながら、二十歳の時「都講」に任ぜられている（「明細帳」）ことからも、円月の努力と学力が人並み以上であったことだけは容易に想像出来よう。以下参考までに、恒遠塾のカリキュラムを紹介しておく。

蔵春園の教育課程・カリキュラム（等級制・授業方法・教科書等）は咸宜園のスタイルを基本的に踏襲するものであった。等級は十級編制で各級に上下を分け（全二〇等級）、最下位の十級は客席と称し、新入生は年齢・学歴・身分に関係なく全て十級下に編入され、成績に応じて順次進級していく。一級上が最上級となる。塾生全員の席次は毎月「月旦評」によって公表される。こうした等級制は塾内の尊卑・序列があくまで成績に依り決定される合理的かつ平等な性格を有するものであった。そのうち、九級・八級を下会生、七級・六級を中会生、五級以上を

上会生とし、授業方法・教科書もこの等級階位に従い難易度に区別が見られる。

下会生は師に就いて「素読」（『孝経』から始め、四書五経）を習い、今日の自学自習に該当する「独見会」（『国史略』『皇朝史略』『日本外史』『日本政記』『十八史略』『元明史略』『蒙求』等）でさらに素読力を向上させる。中会生になると初めて師の「講義」（『孝経』、四書、『諸子（老子・荘子・墨子・孫子・呉子）』）を聴講し、「独見会」では『史記』『春秋外伝（国語）』『戦国策』『韓非子』『漢書』『八家文』『文章軌範』等を読む。上会生は「講義」（五経）、「独見会」（『楚辞』『文選』『春秋左氏伝』『通鑑綱目』その他）である。この他、中会生以上になると、「輪読」、「会読」、「討論会」、「作文作詩」が進級に伴い適宜採用されている。こうしたカリキュラムから窺える私塾の特徴の一つは、学習者本人が文字どおり主体となった教育が実践されていた点にある。(33)

円月は二十歳の時に都講を務めているから、当然最上級（一級上）まで昇級したことは間違いない。そして、「略伝」に拠れば、二十歳にして覚照師に就き初めて宗乗を学んだという。(34) 円月自身、「初めて宗学を致したのは廿歳の時で、同国の覚照師の門に入り、それから月珠師の寮に行きました」(35)と語っているから、そのことは確認出来る。従って恒遠塾修学期間は、十四歳（天保二年（一八三一））から二十歳（天保八年（一八三七））まで約六年（足掛け七年）、都講となって間もなく退塾帰郷したことが知られる。

因みに、一歳年長である同期生の月性は五年近い修学期間を終えて天保六年冬（一八三五）、十九歳で帰郷。(36) 帰郷後、翌七年秋、肥前国善定寺の不及の学寮（精居寮）に遊学し、天保十年まで三年近く宗学を研鑽している。(37) 近世において漢学はすべての学問の基礎であった。武士は勿論のこと、医師も多くは漢学修学から専門医学に進んでいる。同様に当時の寺院子弟は一般に初め地元もしくは遠方の漢学塾等で漢学的素養を身に付け、その基礎教養、基礎学力を十分に修得した後に専門の宗学を学ぶため遠方の師を訪ねてその学寮私塾に、或いは本山学林に遊学し

た。円月の漢学塾修学歴も、そうした同時代に共通して見られる僧家子弟の修学状況、被教育体験の一端を物語っている。

五　漢学塾修学時代の行実（3）月性との交友

「略伝」には「長州の烟溪（清狂道人月性）等と同学たり」[38]と紹介されているが、「刎頸ノ友タリシ」（「明細帳」）なら単なる「同学」以上に親密な間柄であったことになる。詳細は不明ながら、次の円月の回想談は、そうした「刎頸ノ友」月性との交友関係の一端を物語ってくれているように思われる。

私は生来口不調法な者で、若ひ時に恒遠の塾で、先日御話しのありた長州の烟溪（清狂道人月性）と同室に居りましたが、あの人は詩は其時から至て上手な方でありたけれども字が書けぬので、詩稿を先生に出す時にはいつも私が代筆して居りました位で、左程人物とも思はなんだが、兎に角一風変りた男で、自から狂伯と称へて居る。そして私には黙僧と云綽号を呉れたことがありました。之は実に私に適当なので、元来私は訥弁であるから、説教で坊主の職分即ち報恩の経営をすることはできぬから、一番学問でやらうと思ふて専心に勉強を致しました。[39]

月性とは同室（寄宿舎「梨花寮」のことであろう。円月は寮生であったことが判明する）であり、その関係からか詩稿の代筆を円月がしている。また月性から「黙僧」という綽名で呼ばれていたという。もちろん代筆、綽名だけでは「刎頸ノ友」の証明にはならない。何か他に思想的に気脈の通じ合うものがあったのであろうか。

因みに、円月には後年、亡き月性を偲んで詠った二篇の詩作が見られる。「観清狂道人剣舞図有感」「又次韻清狂道人作」がそれである。[40]

前詩は次のとおりである。

海防講策彼一時　艨艟頻圧大洋来　先皇御詠法王歌　臣民誰不唱攘夷
深慨是誰僧月性　酒間剣舞血涙迸　狂豈狂哉奮起人　幾人為国軽身命
月公嘗著護国論　勤王主義在応変　彼以教来以兵襲　我以教拒以兵戦
今也連邦結和親　万里波涛若比隣　西去東来交貿易　妖教無端誘我民
君不見蟲惑曾有織田氏　神祠仏閣尽破毀　皇国々体果如何　我奉我教報国耳

また後詩は左のとおりである。

三十三年歎逝川　鉄腸空向病床捐　如今君在応瞑目　妖教将侵仏法田

これらは一連の作で、月性の三十三回忌（月性は安政五年（一八五八）没。四十二歳）に当たる明治二十三年（一八九〇）の作と推定される。この年、円月は八月安居本講の際独自の二種深信（滅罪論）解釈が問題視されて本講停止となり、安心調査を受けた後、失意のうちに郷里豊前に帰国している。あるいはその帰国途次、妙円寺を訪れて詠んだものであろうか。当時円月七十三歳である。いずれにしても恒遠塾卒業後やがて、海防僧・勤王僧として排耶論、護法即護国論、尊攘討幕論を唱えて政治的活動に奔走した月性とは異なり、円月は僧侶の職分を「学問」に見定めてその道に進んでいる。二人の人生行路は方向を異にすることとなったけれども、今ここで詳論する余裕はないが晩年の円月にも月性の勤王思想、排耶論、護法即護国論に通底する思想が垣間見えて興味深い。断定は差し控えるが、恒遠塾時代に培われた両者の思想的根帯がそこにあったとも考えられよう。(41)

六　漢学塾修学時代の行実（4）師醒窓から受けた影響

円月が直接師醒窓から受けた薫陶、学問的・思想的影響に関しては、現時点では史料が欠けているため検証出来ない。今は間接的になるが、月性に与えられた醒窓の文をとおしてその一端を考察してみたい。取り上げるのは、月性が恒遠塾での修学を終えて天保六年冬（一八三五）帰郷する際に師から贈られた「送煙溪序」[42]と題する送別辞である。

浮屠之道、古専以持戒為主、面壁枯坐、内之則無父兄兄弟之親、外之則無君臣長幼之序、以為不如此、則不能至其道也、故其教隘而其道也小矣、及親鸞師者興、教其徒也、不必以持戒曰、不断煩悩得涅槃、所謂君臣父子兄弟長幼之序、莫不備焉、故海内之浮屠、風靡其教、不奉其道者鮮矣、然而物極必変、至末派之徒乃曰、我祖之教、不設戒律、唯以信心為本、人之為悪固其常也、視其所行、則殺生偸盗邪淫妄語、無所不為、所謂信心果何有哉、余謂使親鸞師観今僧徒、豈不為之慨嘆哉、周南煙溪、奉親鸞師之教者也、従余学先王孔子之道有年、於茲業成、而将帰、帰則又将従其師学其道、臨別余謂之曰、勉哉煙溪、道豈有二邪、子之所学先王孔子之道、即浮屠氏之道也、子帰而順先王孔子之教、内以事父兄宗族、外以接朋友郷党、則誰謂非親鸞師之教哉、至其天堂地獄等之説、余未学之、又当就其師而問之也矣

醒窓は、儒仏一致論（「先王孔子之道、即浮屠氏之道」）の立場から、仏教中在家主義に立脚する真宗を高く評価する。儒教倫理と矛盾することのない真宗は経世実用の宗教として社会的に有用であると捉えている。また当時の真宗教団の現状を、「我が祖の教、戒律を設けず、ただ信心を以て本とす、人の悪を為すは固よりその常なり」と主張して親鸞の教えを曲解し反倫理的行為に走っている、これでは彼らの言うところの「信心果して何ぞ有らん

や」、と厳しく批判している。その論理を進めるならば、正しい信心があればおのずと「先王孔子之道」を守ることが出来、社会から非難を受けるようなことはなく、真宗は社会的に有用な宗教たり得る――。醒窓における「本来の仏教・真宗」観がそこに窺える。[43] 醒窓のこうした真宗観は、その教団批判とともに常日頃、塾生の中に多数席を占めていた真宗寺院子弟たちに語られていたことであろう。その影響を円月も受けていたことが推察出来よう。また「王覇を弁じ大義名分を明かにす」[44]との醒窓の思想も、青年塾生たちにとって何らかの刺激を与えるものではなかったか。これらの点に関しては、取り敢えず後年の円月における真俗二諦論学説（「俗諦薫発説」）、著作『勅語奉体記』（明治二十六年刊）等と照合させて検証しなければならない。

註

（1）児玉識「月性と真宗教団」（三坂圭治監修『維新の先覚月性の研究』月性顕彰会・昭和五十四年）。その他に、海原徹『月性』（ミネルヴァ書房・平成十七年）、恒遠俊輔『幕末の私塾蔵春園』（葦書房・平成四年）にも、同趣の指摘があり参考になる。

（2）筆者は前田慧雲にも同様の評言を使用している。ただし、「行動」の内実は少々異なる。拙論「前田慧雲の学問・思想形成過程をめぐる一考察」（『真宗学』第一一七号）参照。

（3）本論末尾「東陽円月研究史年表」参照。筆者の知る限りでは、児玉識がこの点について指摘しているのみである（註（1）参照）。しかし、円月における真俗二諦論と行信論の関係性に限定された所論で、実証的検証の手続きは省略されている。また、円月を初めとする「豊前学派」から月性は真俗二諦思想の影響を受けたと指摘されているが、「豊前学派」と月性との交渉についても検証の余地がある。

（4）こうした着想は元来、行信論、滅罪論、真俗二諦論、二種深信解釈の各々の個別研究をとおして得たものであるが、児玉識の指摘からもこの仮説が的外れではないことに意を強くした。本論考は、先行研究としては唯一とも言うべき児玉識の円月論（あくまで月性論の文脈の中で言及されているものであり、また註（3）で触れたように検討の必要性

があるけれども）の着眼点に負うところが多いことをお断りしておく。

（5）未だ眼福を得ていないので、本稿では暫定的に児玉識（註（1））の紹介記述に拠る。

（6）堀順乗「略伝」（東陽円月〔堀順乗編輯〕『二諦の精神』法蔵館・明治三十四年）。

（7）仏教大学編『仏教大辞彙第一巻』（冨山房・大正三年）三九二頁。

（8）岡村周薩『真宗大辞典第三巻』（永田文昌堂・昭和十一年）一六一一頁。

（9）井上哲雄著『真宗本派学僧逸伝』（永田文昌堂・昭和五十四年）三一頁～三五頁。

（10）この他に、『真宗人名辞典』（法蔵館・平成十一年）があるが、記述内容は『仏教大辞彙』、『真宗大辞典』、『真宗本派学僧逸伝』を参考にしたものとなっている。また、『真宗叢書第七巻』収載書『本典仰信録』の解題（前田是山両和上古稀記念会・昭和三年）、龍谷大学編『龍谷大学三百年史』（龍谷大学・昭和十四年）八六九頁～八七〇頁にも円月の行実が簡略に紹介されているが、特にいま参考とすべきものはない。

（11）以下の地名変遷に関しては、『角川日本地名大辞典44　大分県』（角川書店・昭和五十五年）、『市町村名変遷辞典』（東京堂出版・平成二年）、『浄土真宗本願寺派寺院名簿』（浄土真宗本願寺派・平成十二年）、『浄土真宗本願寺派寺院住所録』（浄土真宗本願寺派・平成二十一年）等に拠った。

（12）児玉、前掲論文、四九頁。なお恒遠前掲書では「三月三日」生れとしている（九四頁）。

（13）「略伝」一頁。

（14）同右。

（15）児玉、前掲論文、四九頁。他に、海原徹『近世私塾の研究』（思文閣出版・昭和五十八年）四一一頁、同『月性』（前出）二一頁。

（16）児玉、前掲論文、四八頁。海原、前掲『近世私塾の研究』（四一一頁）に拠れば、文政八年（一八二五）から天保十一年（一八四〇）の間の入門者は総計一三九名、うち僧侶が七五名で五四パーセント近くを占めている。

（17）吉富治一「詩人としての月性」（『維新の先覚月性の研究』）三八九頁。

（18）海原、前掲『月性』二〇頁。

（19）『入門簿巻十一』に、「文政二年二月十九日　豊前上毛郡薬師寺邑　恒遠和市」と出る（『増補淡窓全集下巻』一四頁）。また懐旧録（自叙伝）の文政二年条下にも「文政二年己卯。余年三十八。（中略）此年入門スル者。僧法唱府内

人。（中略）恆遠和市豊前人。（下略）」と出る（『懐旧楼筆記巻十九』『増補淡窓全集上巻』二三六頁）。因みに、中島市三郎『咸宜園教育発達史』の「系統表」（四六頁）には、数多い淡窓門下の中に赤松連城、恒遠頼母、大賀旭川の名が見え、さらに恒遠頼母―僧月性と、学系譜が記されている。なお、広瀬淡窓については、井上義巳『広瀬淡窓』（吉川弘文館・昭和六十年）参照。

(20) 『遠思楼日記巻六』文政八年八月二十四日条に「頼母帰郷」と出る（『増補淡窓全集中巻』三五二頁）。「淡窓先生年譜」の淡窓四十四歳時、文政八年（一八二五）条下に「此年都講恒遠頼母大帰す」とある（『増補淡窓全集下巻』二〇頁）。

(21) 『入門簿巻十六』（『増補淡窓全集下巻』）二四頁。

(22) 『増補淡窓全集上巻』二九六頁。

(23) 『遠思楼日記巻五』（『増補淡窓全集中巻』）三三一頁。

(24) 正確には、文政十二年～十三年に「圓備」の名は数回出てくる。しかしその進級状況に留意すると、再び「入塾」「一級下」から始まっており、別人と思われる。以上、「圓備」の進級状況・動静については、『遠思楼日記巻三～巻五』『欽斎日暦巻一』（『増補淡窓全集中巻』）三一四、三二二、三二三、三二四、三二七、三二八、三二九、三三二、三三四、三三六、三三八、三四四、三六一、等の各頁参照。

(25) 『遠思楼日記巻六』（『増補淡窓全集中巻』）三五〇頁。

(26) 『学林万検（巻十一）』（『龍谷大学三百五十年史 史料編第二巻』。以下単に『年史 史料編第二巻』等と略す）一四四頁。

(27) 『学林万検（巻十三）』（『年史 史料編第二巻』）二〇二頁。

(28) 『看護知事名籍』嘉永三年夏条下にも、「兼主議 豊前西光寺住 有隣」と出る（『年史 史料編第三巻』二六三頁）。「兼主議」は当時「助教」より上格の学階で、知事・看護（知事に該当する役職、夏間の学林事務を担当）等学林上級役職に就く者に付与（昇階）されることが多かった。なお、「知事」の要件は、蔵満（学林席次）、一寺住持。以上、「承襲」「知事」「兼主議」については、『龍谷大学三百年史』（龍谷大学・昭和十四年）一五八頁、三五三頁参照。

(29) 『学林江被仰出申渡帳』（『年史 史料編第三巻』）三三四頁。

(30) 『看護知事名籍』（『年史 史料編第三巻』）二六六頁。他に、『監事記録（二）』（『年史史料編第三巻』）四六九頁～四

七〇頁。なお、『学林万検（巻十九）』に拠れば、文久元年（一八六一）正月二十一日の時点で、すでに西光寺住職であったこと、学林懸籍キャリア「廿一夏」であったことが分かる（『年史 史料編第二巻』四七五頁）。

(31) 海原、前掲『月性』一五頁～一六頁。

(32) 海原に拠ると、月性の場合も同様の事情があったようである。かつて咸宜園で恒遠醒窓と同窓であった養父周邦が、淡窓の病状を耳にし、醒窓に「わが子の教育を託した」可能性を指摘している（海原、前掲『近世私塾の研究』四一二頁、同『月性』一五頁～一六頁）。

(33) 以上、恒遠塾のカリキュラムについては、海原、前掲『近世私塾の研究』四一二頁、同『月性』二二頁～二四頁、また恒遠、前掲書、七三頁～八四頁等に拠った。

(34) 「略伝」一頁。

(35) 「学問の秘訣」（前出『二諦の精神』）一四〇頁。

(36) 児玉、前掲論文、四九頁、海原、前掲『月性』二一頁、三〇頁。

(37) 海原、前掲『近世私塾の研究』四一二頁、同『月性』三〇頁～三四頁。

(38) 「略伝」一頁。

(39) 「学問の秘訣」一三九頁～一四〇頁。

(40) 「東陽詩鈔」（前出『二諦の精神』附録）一三頁～一四頁。

(41) 円月と月性との交友関係に関しては、児玉前掲論文（五四頁）では、「円月の思想の中に、月性や増丸（真田増丸―引用者註）の運動へと発展して行く可能性が秘められていた」「月性の後年の活動が円月との交遊＝豊前遊学と無関係でなかった」等と推測ながら両者の思想的交渉の可能性が指摘されている（他に四九頁～五〇頁）。また、海原前掲『月性』（二七頁～二八頁）にも同様の指摘が見られる。

(42) 『月性師事蹟資材一』所収。今は、児玉前掲論文（五八頁）を重引する。但し、明らかに誤植・誤字と思われるものについては訂正した。

(43) 恒遠醒窓の仏教・真宗理解については、児玉、前掲論文、五八頁～五九頁、海原、前掲『月性』二九頁参照。

(44) 註(17)に同じ。

東陽円月研究史年表

	書籍・論文	発行年	内容（論点）	分類
1	前田慧雲『真宗学苑談叢初編』	明治二四年	記載なし	
2	前田慧雲『真宗本派学匠著述目録』	明治二五年	巻末「附、新刊著書目録」に『寶章五十題一巻』を挙げるのみ	著作
3	前田慧雲『真宗学苑談叢後編』（同『真宗学苑談叢』〔改訂版・古稀記念〕）	明治三三年（昭和二年）	記載なし（記載なし）	
4	前田慧雲『本願寺派学事史』	明治三四年	記載なし	
5	西谷順誓『真宗教義及宗学之大系』	明治四四年	「第十三章　沈滞期の宗学」の「一　代表的学説」「三　新傾向」下で、空華学派善譲とともに豊前学派円月の行信論学説を比較紹介し、両者に共通する行信論学説史上の特色（新傾向）を指摘（三八七頁～三九二頁）。滅罪論、真俗二諦論には言及なし	行信論
6	鈴木法琛『真宗学史』	大正九年	記載なし	
7	仏教大学（龍谷大学）『仏教大辞彙』	大正三～一一年	行実・学説（「円月」の項、第一巻）。他に、「一念滅罪」（第一巻）、「二種深信」（第五巻）の各項に学説を紹介	行実 行信論 二諦論 滅罪論
8	梅原真隆「真俗二諦の論攻」其一～其五（同『親鸞聖人研究』第五八輯～第六五輯）	昭和二～四年	諸説を紹介論評。その一つとして東陽円月の学説を「俗諦薫発説」と規定命名し論評。円月の同学説名の初出。他の諸説に比して好意的評価を与える	二諦論
9	『真宗叢書』第七巻解説	昭和三年	収載書『本典仰信録』の解題。円月の行実を簡略に紹介	行実
10	雲山龍珠「月珠師並円月師の行信論」（『龍谷大学論叢』第二八一号）	昭和三年	月珠・円月の行信論学説を論評	行信論
11	杉紫朗「明治時代に於ける真宗学の大勢」（『龍谷大学論叢』第二九三号）	昭和五年	滅罪論学説を紹介論評。他に二諦論、行信論にも簡略に触れる	滅罪論 二諦論 行信論

12	雲山龍珠「東陽円月師の滅罪論」（『龍谷大学論叢』第二九三号）	昭和五年	滅罪論学説を論評。肯定的評価	滅罪論
13	豊水楽勝「足利義山師の二種深信説」（『龍谷大学論叢』第二九三号）	昭和五年	足利義山の二種深信説を論評	滅罪論
14	井上哲雄『真宗学匠著述目録』	昭和五年	円月の著作九四部を紹介（二九頁～三一頁）	著作
15	篠田龍雄「浄満院の滅罪論上に於ける仏凡一体の地位とその批判」（『宗学院論輯』第一四輯）	昭和八年	円月における滅罪論と仏凡一体との関係を論評	滅罪論
16	雲山龍珠「浄満院円月師の『浄土論』の見方に就いて」（『龍谷学報』第三〇五号）	昭和八年	円月の『浄土論』理解を論評	教理史
17	雲山龍珠『滅罪義相』（真宗論題叢書11）	昭和九年	滅罪義論争関係の資料及び学説の紹介と論評	滅罪論
18	雲山龍珠『行信義相』（真宗論題叢書12）	昭和九年	行信義をめぐる学説（石泉・豊前・空華）を論評。「豊前学説の概観」で円月の学説紹介（三〇頁～四二頁）	行信論
19	藤永清徹「真宗滅罪論」（『宗学院論輯』第一八輯）	昭和一〇年	真宗所依の聖教に出る滅罪論関係諸文を列記し分類。また諸師の学説を紹介論評し、最後に自身の説を提示	滅罪論
20	普賢大圓『真宗行信論の組織的研究』	昭和一〇年	行信論学説発達史。豊前学派（月珠・円月）の学説を「円融能行説」として分類論評	行信論
21	岡村周薩『真宗大辞典』	昭和一一年	「東陽円月」（第三巻）、「一念滅罪」（第一巻）、「二種深信」（第三巻）。行実・学説とも『仏教大辞彙』に拠る	行実 滅罪論
22	藤枝昌道「月珠・円月の信願論」（『顕真学報』第一九号）	昭和一三年	月珠・円月の信願論学説を論評	信願論
23	龍谷大学『龍谷大学三百年史』	昭和一四年	行実の紹介（八六九頁～八七〇頁）、論争（行信論…対松島善譲・善海、滅罪論…対足利義山）の紹介（八七六頁～八七八頁）	行実 行信論 滅罪論

24	普賢大圓『信仰と実践』	昭和三四年	主として円月「俗諦薫発説」に拠りつつ教義学的に論を展開。真宗倫理学構築へのすぐれた試論として性格づけられる	二諦論
25	本願寺史料研究所『本願寺史第三巻』『本願寺年表』	昭和四四年 昭和五六年	「第二章 近代的教団の形成」の「四 集会制度の形成」下、「明治十二年の改革運動」記述中に、東京改正事務所の構成員として出る（一八六頁）。その他、『本願寺年表』の一八八七、一八九〇、一九〇二の各年の主要事項欄に行実を紹介	行実
26	井上哲雄『真宗本派学僧逸伝』	昭和五四年	行実・学説を紹介（三一頁～三五頁）。記述は殆ど『仏教大辞彙』に拠るが、行実紹介に一部参考となる点あり	行実 行信論 二諦論 滅罪論
27	児玉識「月性と真宗教団」（三坂圭治『維新の先覚月性の研究』）	昭和五四年	月性論のなかで月性と円月との思想的交渉を論じる。両者のバックグラウンドの共通点、月性に与えた影響という観点から円月の行実・学説に触れる	行実 行信論 二諦論
28	恒遠俊輔『幕末の私塾・蔵春園』	平成四年	恒遠醒窓の私塾を、醒窓の生涯、塾の教育課程、門人、を中心に紹介。門人の一人として東陽円月を紹介	行実
29	『真宗人名辞典』（法蔵館）	平成一一年	行実・著作を簡略に紹介（「東陽円月」の項）	行実 著作
30	龍谷大学『龍谷大学三百五十年史通史編上巻』	平成一二年	行信論、滅罪論、二諦論の各学説を紹介（二五四頁、五三一頁、五三二頁）	行信論 滅罪論 二諦論
31	海原徹『月性』	平成一七年	本格的な月性論。月性の恒遠塾修学時代を論じる中で、同門の円月についても紹介し、二人の交流に触れる	行実

注：東陽円月に関する先行研究を年表にまとめた。直接、間接を問わず東陽円月の行実・学説に論及しているものを中心に取り上げ、また単に紹介記述に止まるもの、言及はないが教学史関連主要著作等も含めた。「分類」欄は内容（論点）を私に主題化したもの。

東陽円月伝記関連資料記述比較表（抄）

出典：①堀順乗「略伝」（同編『二諦の精神』明治三四年一一月三日・法蔵館）　門弟により円月生前（明治三四年八月）に執筆されたもので、「伝記」としては最初のもの。
②『仏教大辞彙第一巻』（大正三年五月一八日・冨山房）見出し項目（漢字）「円月」。
③岡村周薩『真宗大辞典巻三』（昭和一一年二月二〇日、昭和四七年一一月一日改訂再版・永田文昌堂）見出し項目（漢字）「東陽円月」。
④井上哲雄『真宗本派学僧逸伝』（昭和五四年九月二〇日・永田文昌堂）見出し項目「円月」。

注：(1)①～④の各記述を分節事項化し、①を基準にして対比出来るように列記した。
(2)（1、2、…）（ア、イ、…）（a、b、…）（㋐㋑…）の記号は、それぞれ本文記述順を示す。
(3)列記の順は『学僧逸伝』を除き本文記述順に従い、また該当する記述のない事項については空欄にした。
(4)『学僧逸伝』は項目（人名）の冒頭に生没年、所属寺・身分、学系、学階、姓、諡等の基本事項が人名辞典の体裁に準じて掲載されている。これらについては、適宜①②③に該当する事項欄に加えた。記号のないものがそれである。
(5)表記は、漢字を原則新字体・常用漢字に改めた以外は、概ね原文の記述どおりとした。なお、明らかに誤植もしくは誤字と思われるものについては訂正した。
(6)（略）（以下略）は、龍溪。
(7)【　】は考証の便宜上、私に補記したもの。

①「略伝」	②『仏教大辞彙』	③『真宗大辞典』	④『学僧逸伝』
			一八一八～一九〇二【文政元年～明治三十五年】
			【学系】僧樸―僧鎔―道隠―月珠―円月
ア、真宗本願寺派の勧学			勧学
			月珠門人。豊前学派の巨匠
イ、豊前宇佐郡水崎村西光寺の住職		a、大分県豊前国宇佐郡封戸村大字水崎の本派西光寺住職	豊前宇佐郡水崎西光寺住職
ウ、姓を東陽と云ふ			姓東陽

1、豊前国宇佐郡封戸村の人				㋐ 文政元年豊前西光寺に生れ後その寺を継ぐ
2、幼にして老父円超師に就て習字、経書を読む	エ、幼にして老父円超に就て習字・経書を学ぶ	b、幼にして父円超について習字素読を受く	㋑ 幼にして父円超に就て習字・経書を学ぶ	
3、十五歳【天保三年（一八三二）】の時同国恒遠蠡谷先生に従ふて漢学を授かること凡そ五年間	オ、十五歳の時同国恒遠蠡谷に従ふて漢学を受くること凡そ五ヶ年	c、十五歳の時同国の恒遠蠡谷に従ふて漢籍を学ぶこと約五箇年	㋒ 十五歳同国の恒遠蠡谷に従うて漢籍を学ぶこと約五ケ年	
4、長州の烟溪（清狂道人月性）等と同学たり	カ、長州の月性等と同学たり		㋓ 長州の月性と同学であったという	
5、二十歳【天保八年（一八三七）】にして助教（贈司教）覚照師に就て初めて宗乗を学ぶ	キ、二十歳の時覚照に就て始めて宗乗を学ぶ	d、二十歳の時覚照に就て始めて宗乗を学ぶ	㋔ 二十歳の時覚照について始めて宗乗を学ぶ	
6、二十三歳【天保十一年（一八四〇）】、司教（後に勧学に進む）月珠師に従ふて宗乗を修す	ク、二十三歳の時月珠に師事す	e、二十三歳の時月珠に師事して宗学を研く	㋕ 二十三歳月珠に師事して本格的に宗乗を研究した	
7、二十七歳【弘化元年（一八四四）】、本願寺の学林に入り宝雲師に就て余乗を学び、又粟田口雷雨律師に従ふて天台を学ぶ	ケ、二十七歳学林に入り宝雲に余乗を学び、又粟田口雷雨律師に従ふて天台を承く	f、二十七歳本山の学林に入りて宝雲に余乗を受け、又京都粟田口の雷雨律師に天台学を受く	㋖ 二十七歳学林に入って宝雲に余乗を学び、又粟田口雷雨律師に従うて天台を承けた	
8、三十歳【弘化四年（一八四七）】の時肥後に遊学し、断鎧一専等と同じく教恩勧学に就て宗乗を研究す	コ、三十歳肥後に遊学し、断鎧・一専と共に慶恩に就て宗乗を学ぶ	g、三十歳肥後に遊学して断鎧・一専と倶に教恩について宗義を研究した	㋗ 三十歳肥後に遊学して断鎧・一専と共に慶恩について宗義を研鑽した	
9、三十五歳【嘉永五年（一八五二）】の時安居に得業を授けらる				

10、四十三歳【万延元年（一八六〇）】の秋学林参事に任ず				
11、五十四歳【明治四年（一八七一）】の時助教に進む	サ、五十四歳助教に進む	h、五十四歳にして助教を授けられる	㋕ 五十四歳助教	
12、五十七歳【明治七年（一八七四）】司教に進む	シ、五十七歳司教に累進す	i、五十七歳司教に進む	㋖ 五十七歳司教	
13、七十歳勧学【明治二〇年（一八八七）】に転進す	ス、七十歳勧学職となる。時に明治二十年十一月なり	j、明治二十年（一八八七）十一月七十歳にして勧学職を授けられた	㋗ 明治二十年十一月十二日七十歳にして勧学職に陞った	
14、初め明治十一年（師年六十一）【一八七八】同国宇之島の素封家小今井乗桂翁の設立に係る乗桂教校に聘せられ教鞭を執ること十三年、講に列る者実に百七八十人、真宗各派の英才業を成す者多しと云ふ	セ、是よりさき、明治十一年同国宇之島の素封家小今井乗桂翁の設立にかかる乗桂教校に聘せられて教鞭を執ること十三年、化育大に挙がる	k、是より先き明治十一年（一八七八）豊前宇之嶋の素封家小今井乗桂の設立に係る乗桂教校に聘せられて教授に任ずること十三ヶ年に及び、その間教校は盛大の極点に達した	㋘ これより先、明治十一年同国宇之島の素封家小今井乗桂翁の設立に係る乗桂教校に聘せられて教鞭を執ること十三年、化育大いに挙がる	
15、後明治二十三年【一八九〇】七月本山の命に応じて、『二巻鈔』を学林に講ず	ソ、二十三年七月山命により二巻鈔を学林に講ず	l、明治二十三年の安居に愚秃鈔を講ず	㋙ 明治二十三年七月安居に「二巻鈔」を本講した	
16、然るに説当路者と合はずして擯斥を蒙る	タ、二種深信の義に就いて義解穏かならずと認められ、停講を命ぜらる	m、（二種深信をめぐる独自の説を紹介…略）聴衆の反対を受け、終に義解穏かならずと認められて停講を命ぜられた	㋚ （二種深信をめぐる独自の説を紹介…略）聴衆の反対を受け、終に本山の取調べとなり、安心に不正はないが義解穏かならずと判決せられ停講を命ぜられることになった	
17、終に「暗裡投珠人按剣（以下略）」「桜田門外雪如花（以下略）」の悲歌を詠じて孤錫飄然郷に帰る	チ、終に「暗裡投珠人按剣（以下略）」の一絶を残して、孤錫飄然郷に帰る		㋛ 「暗裡投珠人按剣（以下略）」の一絶を残して、孤錫飄然郷に帰った	

18、爾来十余年、西海の草廬に静臥して専ら青年の薫陶と著書とに全力を注ぎ、著す所の書積て等身以上に及び、広く世に刊行して人の知る所となる	ツ、爾来十有余年、東陽学寮を自坊に起し、専ら後学の薫陶と著書とに努む	n、爾来十有余年間自坊に在て東陽学寮を開き、後進の教育と著述の事に努める	(タ)爾来十有余年、自坊に先代円超の創立した東陽学寮を再興して後学の指導と著述とに精力をそそぐ	
19、(明治三十年～三十四年七月までの各地夏期講習会等出講の行実紹介…略)	テ、又時に各地に巡錫して教化大に挙がる		(チ)又時に各地に巡錫して大いに教化の実をあげた	
20、(明治三十三年以来の病状、三十四年八月危篤の報知を受けたことを紹介…略)師春秋実に八十有四、長寿ならずとせずと雖目今斯学の衰頽を極むるの時、吾人は深く明師の凋落を悲む者なり	ト、三十五年十二月十七日寂す、寿八十五歳	o、明治三十五年(一九〇二)十二月十七日八十五歳にして入寂	(ツ)遂に明治三十五年十二月十七日示寂、享寿八十五	
この後、円月の性格、宗学の特徴、余芸に堪能だったことを紹介(略)	ナ、浄満院と諡す	p、諡して浄満院と号した	諡浄満院	この後、円月の門下、宗学の特徴、門下生への教示、余芸に堪能だったこと、著作等を紹介(略)
	この後、円月の宗学の特徴、門下生への教示、余芸に堪能だったこと、著作等を紹介(略)	この後、円月の宗学の特徴、門下生への教示、著作を紹介(略)		